

## 19 世紀入華宣教師クローフォードの軌跡

宮田和子

### はじめに

『英華萃林韻府』(1872)を著したドーリトル(Justus Doolittle 盧公明 1824~1880)は、*The Chinese Recorder* 第3巻の編集者でもあった。『英華萃林韻府』の第1部と第2部は通常の語彙集と共通の性格をもっているが、第3部はフィールドワークの集大成ともいうべく、現地語収集に賭けたドーリトルの意気ごみのほどがうかがえる。『英華萃林韻府』第3部の専門用語の執筆者のなかに、*The Chinese Recorder* 第3巻の寄稿者と同じ名前がみえる。これはドーリトルの個人的要請に応じて執筆したためと思われる。クローフォードもそうした人物の一人であった。

クローフォード回顧録としては、フォスター (L.S. Foster) が著した *Fifty Years in China* (1909) があるが、潤色が施されていると思われるので、I. T. Hyatt 著 *Our Ordered Lives Confess: Three Nineteenth-Century American Missionaries in East Shantung* (1976) の執拗にして微細きわまるクローフォードの対人関係分析と、当時のプロテスタント宣教師の断片的ながら正確な行動記録、*The Chinese Recorder* の記事を参照して、随時修正を加えながら、クローフォードの足跡を追ってみたいと思う。Hyatt 1976 はクローフォードの行動におおむね批判的である。

### 1. 生い立ち

父はジョン・クローフォード (John Crawford)、母はルクレティア・クローフォード Lucretia Crawford)、バプティストの農民でケンタッキー州 Warren 郡に住んでいた。7人の息子のうち長男と次男は農民として父の後を継ぎ、3番目と6番目の息子は法曹界に入った。その一人トーマス (Thomas Crawford) は判事だったが、彼に絞首刑を宣告された犯人が脱獄し、帰途を待ち伏せして殺された。南北戦争直後の無法時代のできごとだった。当時のケンタッキーは人口もわずかで教育環境は劣悪だったが、知識欲旺盛な母親が農耕のあいまに、本稿の主人公タールトン (Tarleton Perry Crawford, 1821~1902、以下‘クローフォード’と記す) の勉学を助けた<sup>1</sup>。

クローフォードは1821年5月8日4番目の子として生まれ、説教師ごっこをして遊んでいた16歳のとき、トーマスのことばを聞いて懺悔し、やがて受洗する。勉学を志し故郷を離れてミシシッピに向かう。聖職に就くことを決意して、テネシー州 Henry 郡の Bird's Creek Church のメンバーになる。このころケイル (Peter S. Cayle) という篤志家が、彼の勤勉さに打たれて

---

<sup>1</sup> Foster:19~24

住まいを提供し、勉学をつづけるようにと救いの手をさしのべる。1848年初めテネシー州 Union University に入学し、1851年卒業。卒業前の1850年ヴァージニア州の Southern Baptist Convention の Foreign Mission Board から、上海への派遣宣教師として認可をうけた<sup>2</sup>。

## 2. クローフォード夫人

のちにクローフォード夫人となるフォスター (Martha Foster 1830~1909) は、1830年1月28日ジョージア州 Jasper 郡で生まれた。父はジョン・ラブレイス・サビッジ・フォスター (John Lovelace Savidge Foster)、ジョンおじさん (Uncle John) とよばれて親しまれ、Tsucaloosa 郡 Creek Baptist Church のメンバーで、有能な牧師補として活躍した。フォスターの教育は6歳か7歳のころフォスター・セツルメントの学校で始まった<sup>3</sup>。

彼女の性格形成に決定的な影響をあたえたのはティーグ (F.B. Teague) 師だった。フォスターは1845年秋入信、1849年6月アラバマ州の Mesopotamia Institute を卒業し、家族のもとでしばらく幸せな生活を送っていた。しかし無為な生活にあきたらず、教員生活を志すが思うにまかせず、悶々とした日々でもあった。1849年11月14日主に祈りを捧げていたとき、異教徒に福音を伝えよという神の声が、抗しがたい力をもって彼女の胸を貫いた<sup>4</sup>。

彼女の揺るがぬ決意を確認したティーグ師は、Southern Baptist Convention のテイラー (J.B. Taylor) 書記に書簡を送り、未婚の女性の海外派遣の可能性を打診した。そのころ本部の活動拠点 Richmond にいたクローフォードは、海外伝道を望むこの女性こそ理想の伴侶とかがえて、まずティーグ師との接触をこころみる<sup>5</sup>。

曲折あつてフォスターのもとを訪れた青年クローフォードの出現に両親は絶句、親族は異教徒の跋扈する中国に行くという彼女の決意を聞いて驚愕し、きちがい沙汰だと翻意を迫るが、彼女の決意は変わらなかった<sup>6</sup>。結婚式は1851年3月12日に行なわれた<sup>7</sup>。

## 3. 旅立ち

1851年11月17日夫妻は Horatio 号に乗船、ニューヨークを出発した。Horatio 号は茶の輸送用につくられた船で換気設備もろくになく、荒天下の船客はかなりの苦痛を強いられた。サンフランシスコに鉄道が敷かれる15年も前の話で、喜望峰をめぐる船旅の苦痛は、当然忍ぶべきものとされていた。順風に恵まれ Horatio 号は102日目に香港着。最終的に Minna 号で上海に

---

<sup>2</sup> Foster:24~28

<sup>3</sup> Foster:29, 30

<sup>4</sup> Foster:29, 30; Hyatt:6

<sup>5</sup> Foster:29, 30

<sup>6</sup> Hyatt:7

<sup>7</sup> Foster:44

着いたのは、1852年3月30日のことだった<sup>8</sup>。現地でシャック(Jehu Lewis Shuck)、エイツ(Matthew Tyson Yates, 晏馬太)をはじめとする同僚たちの歓迎を受けた<sup>9</sup>。当時の上海は条約5港のひとつとして開かれ、肥沃な揚子江流域にあって、宣教師や商人の居住地としては最適で、英語話者コミュニティーも形成途上にあった。しかし最初の夏に旱魃にみまわれ、飢饉、貧困、社会不安への恐怖を体験することになる<sup>10</sup>。

#### 4. 布教の方策を模索

当時すでに男児のための昼間の学校が1校、女兒のためには寄宿制の学校(boarding school)が1校開かれていて<sup>11</sup>、女性宣教師が管理していた。中国人は男子の教育には熱心だが、女子の教育は時間と金のむだだとかんがえていたので、女子校を維持するには食事や衣服を与えなければ、生徒になりてがないという状況だった。クローフォード夫人も一時この方策をとり、その結果女生徒は10名を超えた。宣教師は子供を外国へ売り飛ばすという噂が流れたことがある。噂のもとにはアヘン吸引者の現地人教師とわかって、すぐに解雇はしたものの、風評被害はしばらく尾をひいた<sup>12</sup>。

新しく雇い入れた中国人のなかに Yee 夫人がおり、1855年上海における最初の受洗者となった。同じく上海最初の男性入信者は Wong Ping San (Huang P'in-san, 黄品三)、初の終身会員で、のちに上海バプティスト教会(Shanghai Baptist Church)の教区牧師となった<sup>13</sup>。

クローフォードは上海方言の発音表記システム(phonetic system)を開発し、1888年3月 *The Chinese Recorder* に発表した<sup>14</sup>。中国語に無知であっても、このシステムを使えば1,2週間で中国語を書くことができるようになるという触れ込みだった<sup>15</sup>。彼はこのシステムにもとづいて説教を試みたが、結果はおもわしくなかった<sup>16</sup>。

#### 5. ひろがる社会不安

1853年のはじめあたりから上海近郊の居住者は、戦乱の噂におびえるようになる。太平天国

<sup>8</sup> CR8:313, 387。

<sup>9</sup> Foster:50, 51; Hyatt:8。

<sup>10</sup> Foster:54~59。

<sup>11</sup> CR12:391 クローフォードは1872年芝罘に開設した日曜学校の監督を務めていた。教師13名、生徒100名。授業料は無料。

<sup>12</sup> Foster:62~64。

<sup>13</sup> Foster:82~92; Hyatt:10 黄品三はクローフォードの最初の入信者。Foster 巻頭に写真。

<sup>14</sup> CR19:101~110,236; CR40:291; Foster:66~69, 353~361; Hyatt:9。

<sup>15</sup> Hyatt:9。

<sup>16</sup> Wylie 1967:iii, Foster:69 Wylie はこの発音表記システムを高く評価している。

の乱である。クローフォード夫妻は1853年盛夏を城壁 (city wall) の外のエイツの家で過ごした。城門が閉じてしまうと脱出する術はない。砲声が政府軍の到来を告げ、包圍網の接近を知らされる。包圍が終わる兆しをみせたのは、1855年のはじめになってからのことだった。その間政府軍による掠奪とテロ行為は極限に達した<sup>17</sup>。

## 6. 上海におけるクローフォード

クローフォードは一貫して中央組織による権力の一極集中を排し、現地教会の自立を推進すべきであると主張し、自らの行動もその理念に従って愚直なまでに誠実に律しようとし<sup>18</sup>、傘下の現地人会員にも同様の厳格な規律に基づく行動を要求した。報酬目当ての会員のなかからは脱落者が続出した。

上海のバプティスト教会はシャックとエイツのふたりが牛耳っていたが、ふたりの仲は険悪でたがいに相手を追い落とそうしていた。クローフォードは慎重に圏外にいて難を避け、中国語の修得に専念した。発音表記システムは不評だったが、1853年には中国語で話すこともできるようになり、クローフォードは早速説教行脚を始めた。説教は諸事情に通じた現地人助手にまかせるべきだという一般の意見には耳を貸さず、あくまでも自分で説教すると主張して譲らなかつた。助手に任せて失敗したギュツラフの轍を踏みたくないというのがその理由だった<sup>19</sup>。ギュツラフの挫折は宣教師仲間に動揺をあたえたが、クローフォードが助手全員の資金供給源を断って自立させようと提言すると、以前にもましてつめたい反応が返ってきた。それなら自分の流儀でやるだけだと、クローフォードは郊外に出かけて農民相手に説教を始めた。使徒パウロの生きかたを理想とし、相手が誰であれ他人の築いた基盤を利用すること、その結果周縁にいて助手の地位に甘んじることは、クローフォードのなしうることではなかつた<sup>20</sup>。

米本国の南北戦争の結果、本部からの資金援助が期待できなくなると、クローフォードは月額10ドルで現地商人に英語を教え始めた。1861年秋には不動産のエージェントとして、地元所有者の外国人向け土地売却をたすけた。反乱の影響で海外貿易の中心は広東から上海に移行し、浮き足立った地元中国人が手放した不動産の値上がりを待ってクローフォードは商才を発揮した<sup>21</sup>。儲けを再投資して土地を広げては貸し出すというやり方で、年収は3000ドルに達した。以後何事もなければ、クローフォード夫妻は生涯を本部からの仕送りなしで過ごせるはず

<sup>17</sup> 東洋文庫蔵 P-III-a-2794 クローフォード夫人が親戚にあてた手紙。Foster:70～79。

<sup>18</sup> Crawford:5～22, 24～63。

<sup>19</sup> Crawford:26; Hyatt:9 ギュツラフ (K. F. A. Gutzlaff, 郭実獵) は中国人を信頼して活動資金を与えたが、完全に裏切られて憤死した。中国人の狡猾さを強く印象づけるできごとだった。

<sup>20</sup> Hyatt:9。

<sup>21</sup> Foster:130 英中両国語に長じ、商才にたけていたクローフォードは、一時不動産取引で財を成した。好機を見逃さず危ない橋も渡ったが、個人的に流用することはなかつたという。

だった。しかし1863年不動産価格は下降線をたどり始める。クローフォードはコレラにかかり、夫人も肝臓障害をおこしたので、二人は健康回復のため1863年8月上海を離れて山東へ向かった<sup>22</sup>。山東での布教活動は始まったばかりで、クローフォードは教区牧師として存分に活躍できるものと期待していた<sup>23</sup>。

## 7. 宿敵ハートウエル

クローフォード夫妻が山東の拠点登州（Tengchow）に着いたときは、すでに先任者がいた<sup>24</sup>。2年前から滞在していたサウスカロライナ出身のハートウエル（Jesse Boardman Hartwell, 海雅西）で、すでに現地教会のひとつを管理下においていた<sup>25</sup>。しかし1864年ハートウエルは給料をめぐる不満から上海に去り、その結果クローフォードは上海以北の Southern Baptist Church の教区牧師として腕をふるうことになった<sup>26</sup>。

クローフォードは2年間でハートウエルの残した15人のほかに、8名を受洗させることに成功した。しかし米本国の南北戦争が終わると、ハートウエルは上海のしごとをやめ、1865年末には登州にもどった。地元民はハートウエルに親近感をもっており、彼を父と慕う者もいた。ハートウエル家に同居していたクローフォード夫妻との仲はたちまち陰悪になり、やがて修復不能に陥った<sup>27</sup>。

外国人に対する悪感情から移転先がみつからず、斡旋を依頼された新参者の助手が、自分の名義で借りた家をクローフォードに又貸しすることで解決を図った<sup>28</sup>。この事件はいわゆる“教案”（キリスト教に関わる事件）に発展した。交渉の一部始終を目撃していた15名も地主も、外国人に貸すとは聞いていない、だまされたと憤った。クローフォードはスタンフォード（E. T. Stanford）領事に援助を求めたが、事態は一触即発の危機にあり、激高した群集との乱闘さわぎにまで発展した<sup>29</sup>。

スタンフォードが外交圧力をかけて、事態は一時鎮静化したが、一連の事件は将来に禍根を残すことになった。クローフォードはただちに新居の改装に着手したが、その目的は快適な住まいよりも、新しい教会の会員をひきつけることにあった。クローフォードはこれを Monument

---

<sup>22</sup> Foster:135 クローフォードは脳軟化症からくる脚部の麻痺になやまされていた。

<sup>23</sup> Hyatt:11

<sup>24</sup> CR2:58

<sup>25</sup> CR20:355～361

<sup>26</sup> Hyatt:12

<sup>27</sup> Hyatt:13

<sup>28</sup> Hyatt:13

<sup>29</sup> Hyatt:14

Street Baptist Church と呼んで、ハートウエルとのちがいを印象づけようとした<sup>30</sup>。

会員はしだいに増え、このまま順調に発展しそうな気配もあった。一方クローフォード夫人が上海で出版した『造洋飯書』(1866)は、270種もの洋風レシピを中国語で紹介して、根強い人気を保った。夫人は男子寄宿校の開設を考え、クローフォードの意見を求める。クローフォードは乗り気ではなかったが、彼個人としては参画しないことを条件に、開設を承諾した。夫人もクローフォードも、やがて敵意緩和に役立つとして、教育の効果を認めるようになり、若い女性の積極的な参加を期待した。1868年には男女とも増加、道義心も向上の兆しをみせた<sup>31</sup>。

しかし1860年代の末期にはふたたび暗雲が漂いはじめた。クローフォードが芝罘と登州の間あたりで、鉱物調査を始めたことがきっかけだった。現地の人びとは祖先の墓を荒らすとして調査の中止を要求し、クローフォードはこれも外国人排斥策の一環であるとして非難した。1868年8月科挙の資格をもつクローフォードの助手、盧鳴韶(Lu Ming-chao)が不法掘削の嫌疑を受けて逮捕された。クローフォードはこれを彼自身に対する挑戦と受けとめ、米国の外交筋を通じて調査続行を訴えたが、不成功に終わった<sup>32</sup>。

安息日に店を開いたとして解雇通告をつきつけるなど、クローフォード自身にも協調性に欠けるところがあって、クローフォード夫人を嘆かせた<sup>33</sup>。一方ハートウエル一家は、集会でのクローフォード夫妻との同席を拒否、仲裁をかってでる人物もあらわれたが、不成功に終わった<sup>34</sup>。

1870年秋天津虐殺<sup>35</sup>に怯えた登州の外国人コミュニティが集団で芝罘に脱出し<sup>36</sup>、ハートウエルも本国にひきあげたが、その際信頼する中国人助手 Wu Tswun Chao を昇格させて、後事を託した。クローフォードの勢力拡張を防ぐためだったが、クローフォードは冷静に対応して事なきをえた<sup>37</sup>。

1870年代の初めからクローフォードの精力的な活動がはじまり、自宅から離れた Monument

<sup>30</sup> Hyatt:14; CR20:355~361 現地教会の自立をいかにして培うか (How may we best foster Self-Support in our Native Churches?) と題するハートウエルの長い論文で、「かねをかけないことが自立心を養う最良の方法だとは必ずしも言えない」と、あきらかにクローフォードを意識したと思える発言をしている。

<sup>31</sup> Hyatt:16, 17。

<sup>32</sup> Hyatt:19。

<sup>33</sup> Hyatt:19。

<sup>34</sup> Hyatt:20。

<sup>35</sup> CR3:207~212。スタンレー (C.A. Stanley) による天津虐殺の記録。

<sup>36</sup> Foster:161~164 天津虐殺の結果、不穏な噂がひろまり、宣教師たちは米領事に砲艦の派遣を要請し、全員芝罘にひきあげた。中国の地方官吏はこれのみて腰くだけになり、以後強行手段に訴えることはなかった。改宗を装う者も現れた。

<sup>37</sup> Hyatt:21。

Street に実際に布教施設をつくりあげた。本部が資金の拠出をしづっていたとき、クローフォードは 3,000 ドルを支出して建築費にあてた。教会は 1872 年に完成し、安息日を示す白い旗が内庭になびいた<sup>38</sup>。整えた座席は 280、1875 年には会員は 57 名となった。逸話をもりこみ豊かな話題を提供するなど、現地の聴衆に合わせて説教のスタイルにも工夫を凝らした<sup>39</sup>。

クローフォードは何度も「民主的 (democratic)」ということばを口にしたが、1860 年代の彼は中国人はまだ子供だとかんがえていて、教会は真剣な礼拝の場であるから行動には規則が必要で、男女は席を同じくせず、喫煙、ムダ話は一切ご法度と言いつつ渡した。つきあいや商売の過程で生じた難問は、教会の場で目撃情報も含めて冷静に討議し、民主的な投票によって解決に導く。解決のむずかしい争議には、教区牧師のクローフォードが裁決を下す、とした。クローフォードの問題解決の鍵は、信仰の純粹さをいかにして保つかということが根底にあり、これが現地の妥協的な解決法とのくいちがいを生んでいた<sup>40</sup>。中国の伝統的な習慣に異を唱えるつもりはないが、キリスト教を接木移植するのではなく、異教の根を絶ってキリスト教を根づかせることが目的だ、というのが彼の言い分だった<sup>41</sup>。

彼はこのころ、1850 年代以降中断していた著作活動にとりかかる<sup>42</sup>。クローフォードはハートウエル一家を除いては、好感のもてる理想的な宣教師とみられてもいた。しかし、中国人が彼に愛情を感じたとか、彼が中国人に愛情を感じたとか、その事実を認めたとかいった類の記録は一切ない<sup>43</sup>。

## 8. Kao Ku San 事件

この事件の主役は芝罘に住む Kao Ku San という裕福なクリスチャンの商人だった。ハートウエルの帰国の際に後事を託された Wu Tswun Chao ともハートウエルとも友好的な関係にあり、毎年 300 ドルを登州の North Street Church に寄付して、名誉会員待遇をうけていた。彼が貧困の淵から這いあがったのは、ホームズ (James Landrum Holmes, 花三) 一家とのつながりが大きく影響している。ヴァージニア出身のホームズ 3 兄弟は、宣教師、外交官、それに商人として、1860 年代を通じて芝罘で幅をきかせていた<sup>44</sup>。ホームズ (Matthew G. Holmes, 花馬太) の

<sup>38</sup> CR1:142 クローフォードは毎日曜チャペルの内庭に「安息日」と中国語で書いた旗を掲げることを提案した。

<sup>39</sup> Hyatt:21。

<sup>40</sup> Foster:169 クローフォードは聖職と俗世間とを明確に区別して行動し、一貫して地元牧師の自立をめざした。この事実が知れ渡ると、多数の脱落者が出始めた。

<sup>41</sup> Hyatt:22。

<sup>42</sup> Hyatt:23, 300, 301 クローフォード夫妻著作一覧。

<sup>43</sup> Hyatt:24。

<sup>44</sup> Hyatt:25。

経営する商社、清美行 (Ch'ing Mei Hong) は、天津と上海に支店をもっており、雇用された Kao Ku San は、やがて共同経営者に昇格し、清美行の外洋航海用蒸気船 Dragon 号の所有権を獲得し、さらに芝罘の不動産に投資して、資産の拡大を図った<sup>45</sup>。

クロフォードは清美行の成功に魅せられ、1860年代末 5,900 両 (10,000 ドル相当) を投資し、清美行上海支店はさらに事業を拡大した。しかし 1871 年、ホームズ (Matthew G. Holmes) が彼の不動産を妻名義に変更し、急いで帰国を準備しているとのうわさを聞きつけたクロフォードは、ホームズ一家とともに Kao と話し合う。詳細は不明だが、話し合いの結果 Kao は清美行とその借金を肩代わりするという条件で、英語で書かれた契約書に署名した。彼がクロフォードに負っていた借金の抵当に、Dragon 号と広大な自宅を含む不動産の一部を宛てた、というのが真相らしい<sup>46</sup>。

Kao はこの時点で清美行がすでに債権者に借金の返済を迫られているという事実を、クロフォードには隠しており、一方ホームズ (Matthew G. Holmes) は 1871 年 12 月に帰米したまま、中国にはもどらなかった。クロフォードと Kao は双方とも真相はわからぬままに署名したことになるのだが、このことが双方を破局に追いこんでいく<sup>47</sup>。

ところが場面は意外な展開をみせる。1872 年、1 年間の米国滞在を終えたハートウエルが 2 度目の結婚をした新妻をともなって突然中国に現れ、登州は信頼できる Wu に任せて、芝罘の安定に精力を注ぐ、と宣言した。この新たな展開にクロフォードは冷静に対処して North Street church と共同歩調をとることを約束した。ハートウエルの元助手は Wu を除く全員が芝罘に移って、ハートウエルを助けることになった。ハートウエルの二股戦略が功を奏しはじめたことになる。登州の活動資金は個人の寄付もあったが、大半は本部から、ハートウエル経由で拠出されていた。100 ドルを超える Wu の俸給や North Street の娯楽費、さらにはリーダー格の人物の個人的な支出の一部にも、この資金があてられていた<sup>48</sup>。

クロフォードを激怒させたのは、North Street 教会は外国人を必要としない地元民の自立組織だから、外部からの援助も不要だとする、ハートウエルと Wu の言い分だった。これはクロフォードの目には、登州における新たな抗争を意図する 2 人の隠蔽工作としか写らなかった。しかも登州の自立資金は、クロフォードに多額の借金のある Kao が支出した、とされていた<sup>49</sup>。

1872 年クロフォードは Kao に強い圧力をかけて返済をせまった。しかし Kao の財政状態はさらに悪化しており、クロフォードの要求に応じられるあてはなかった。清美行上海支店長

---

<sup>45</sup> Hyatt:25, 26。

<sup>46</sup> Hyatt:26。

<sup>47</sup> Hyatt:26。

<sup>48</sup> Hyatt:27。

<sup>49</sup> Hyatt:27。

Li-Chin-yuは希代の詐欺師で、Dragon号の資金完済に使われるはずだった4万両を持ち逃げし、そのために清美行は破産寸前になっていた<sup>50</sup>。

紆余曲折あって窮地に追い込まれた Kao は、ハートウエルの意向を無視して、クローフォード告訴に踏み切る。Kao側の証人のひとは Kao の義理の息子、もうひとはハートウエルのリーダー格の助手だった。結果は Kao の敗訴となり、逆上した Kao はピストルをもって登州に押しかけ、クローフォードを殺害しようとする。クローフォードは隠れて難を逃れ、中国側と米領事の双方に Kao の身柄拘束を申しでる。中国側は行動を起こさず、ハートウエルは事を穏便にすませるよう、米領事を説得する<sup>51</sup>。

## 9. 教会と学校と健康

1876年以降のクローフォードの生き方は、振り子のように揺れ動く。Wuとその追随者はクローフォードに冷たい視線を向けつけ、クローフォードは解雇もやむをえないと判断する。進んで辞職を申し出る者もあり、宗教的とはとてもいえない雰囲気は漂っていた。金銭問題についてのクローフォードの方針を、周囲が理解できないことも大きな障碍だった。当時麦の減収から華北は飢饉に見舞われ、死者は1300万人に達すると予想された。牧師補佐 Sun Kyi Diの率いるグループが、貧民救済のためと称して教会資金からの貸付を要求したが、クローフォードは許可しなかった。KaoとWuとの争いに嫌気がさして離反する会員が多く、それまでクローフォードを支持してきた Sun 一家との溝も深まった<sup>52</sup>。

もうひとつの問題はクローフォード夫人の男子校だった<sup>53</sup>。入学者もふえ、カリキュラムも充実していたが、クローフォードの教育に対する情熱はさめた。夫人はクローフォードに協力して、もっと布教活動に専念すべきで、学校はそれを阻害している、というのだった。

クローフォード夫人の1876年の日記からは、彼女が生徒のことに集中するあまり、ほかの事には事実上関心を払わなかったことが読みとれる。特にクローフォードを悩ませたのは夫人が、早熟でいながら心身の健康面では不安定な Kwo Yu Yoong という生徒に惹かれているらしくみえることだった。彼女自身にもわからない感情で、日記には「中国人にこんなに魅力を感じたことはなかった」と書かれている<sup>54</sup>。

ともあれ夫人が Kwo のことを非常に気にかけていたことはたしかで、Kwo もまたそれに応えた。夫人は Kwo が将来教師のリーダーとして夫人のしごとを引き継ぐことを望んでいた。Kwo

---

<sup>50</sup> Hyatt:27。

<sup>51</sup> Hyatt:28。

<sup>52</sup> Hyatt:32, 33。

<sup>53</sup> CR4:308 登州のミッションスクール2校の男子生徒が、中国古典の分野で現地の男子校を抜く成績を収めたと報じた。

<sup>54</sup> Hyatt:34。

は一方では Mary Kiang という少女にロマンティックな愛着をもっていた。しかも面倒なことに、この少女は Wu の教会の存在感ある会員であり、ハートウエル一家のお気に入りでもあった。クローフォードは絡んだ事態をのりきるために、著作活動に関心を向けた<sup>55</sup>。

Kao に与えられた 2 年間の猶予期間は 1876 年の夏で終わった。クローフォードの借金は返済されないままだった。クローフォードは中国側を追い詰めて Kao のほぼ全財産の引渡しを要求し、つぎに Kao を借金未払いのかどで投獄に追いこんだ。同時にクローフォードが企てたのは、夫人同道で日本へ旅行することだった<sup>56</sup>。夫人の日記はこれを、「きらわれる存在という大きな負担から逃れるためだった」と表現している。京都ではイギリス人の孤児 2 人と養子縁組を結んだ。夫人は乗り気ではなかったが、クローフォードが強引に押し切ったというのが真相らしい。家系を継ぐべき子供がいないことは神の不快感のあらわれだとする中国人の通念に対応するためだ、ともされた。夫人の関心を学校と Kwo からそらせるという効果も期待できるはずだった<sup>57</sup>。

クローフォードはひそかに Kao の財産の譲渡手続きをすませ、1876 年 12 月の Kao の釈放の日を待った。同僚の宣教師もむろん Kao 自身もクローフォードの慈悲を乞うたが、彼は一切耳を貸そうとせず、Kao の自宅までも第三者に売却して、復讐を遂げた<sup>58</sup>。

クローフォード夫妻は心身ともに衰えていった。クローフォードは神経麻痺になり、夫人もまた茫然と時を過ごすことが多くなり、やがてめまいから物事に集中できない状態が続いた。晩年のクローフォードの残忍さと圧倒的な自己中心性は、彼があれほど軽蔑していたハートウエルの欠陥と、なんら変わるものではなかった、と言える<sup>59</sup>。

## 10. クローフォードの理念と挫折

Kao 事件に結着をつけてからも、クローフォードの攻撃は止まらなかった。つぎの矛先は、主導権問題の解決に向けられた。教会監督の Sun Chang Lung を追放すると同時に、教育費の削減にとりくんだ<sup>60</sup>。夫人の男子校の父兄と教師を呼び集めてそれまでの寛容すぎた教育方針の変

---

<sup>55</sup> Hyatt:34, 35; CR33:456~458 ボスティック (G. P. Bostick) によるクローフォード追悼記。「信念の人。義に悖る行動を潔しとせず、誤解を招いても釈明しなかった。本国の新聞でも悪評をたてられたが、大勢に抗して現地教会の自立推進に貢献した」と序文にある。CR4:257~261; CR5:199~204 救世主キリストの磔刑から復活までに要した時間の合理的な説明が成立するか否かについて、さまざまな角度から論じた。CR11:411~429; CR12:77~86, 193~201 クローフォードの著作について。

<sup>56</sup> CR7:383。

<sup>57</sup> Hyatt:35。

<sup>58</sup> Hyatt:35。

<sup>59</sup> Hyatt:36。

<sup>60</sup> Hyatt:36。

更を宣言し、生徒全員ただちに 1 ドル相当の謝礼を納めること、謝礼はその後段階的に増額すること、中国人教師は外国人教師に較べて資格と能力の点で劣るという理由で、減額処分することを申し渡した<sup>61</sup>。

養子となった 2 人のこども、ミニニー (Minnie) とフレディー (Freddie) が京都からやってきた。アメリカでは本部がハートウエルとの契約を解消し、Wu は North Street 教会から手を引いた。クローフォードにとっては吉報だった<sup>62</sup>。そのころクローフォード夫妻はプロテスタント宣教師の全国会議 (General Conference of Protestant Missionaries in China, May 10-24, 1877) に参加するため上海に向かっていた<sup>63</sup>。21 を数える欧米の宗教組織を代表して 126 名の宣教師が集まった。夫人は「女性の仕事は女性の手 (Woman's Work for Woman)」<sup>64</sup>と題して報告、クローフォード自身も「現地人助手の雇用の適否を問う (Advantages and Disadvantages of the Employment of Native Assistants) を発表した<sup>65</sup>。上海ではハートウエルがふたたび蠢動を開始、本部に向けて執拗にクローフォードの個人攻撃をくりかえした<sup>66</sup>。

翌日の全国会議の席上、クローフォードは組織の改革の必要性を聴衆に訴えた。改宗したとはいえない (half-Christianized) 中国人信徒を教会は雇っているが、彼らの大半はキリスト教の何たるかを解せず、金ほしさで集まってくる信者を増やすだけで、却ってキリスト教に対する侮蔑の念を煽るのに役立っている、中国人は生まれながらにして道義心に欠けている、というのが主な論点だった<sup>67</sup>。翌日の討論では、クローフォードは故意に中国人を貶めて、自身の評価を高めようとしている、という者、自己撞着で破壊的だと非難する者が入り乱れるなか、クローフォードは精力的に持論を展開し、一時はどうなることかと危ぶまれた<sup>68</sup>。

全国会議の結果についてクローフォードは楽観的だった。ハートウエルの執拗さに閉口していたリッチモンド (Richmond) の本部は、ハートウエルの非を鳴らして、カリフォルニアの中国移民の仕事をするよう勧告した。2 番目のハートウエル夫人は大の中国人嫌いだったので、たちまち罹病し、死亡した<sup>69</sup>。

1878 年 2 月登州バプティストの合体を実現させようとして、旧ハートウエル派の反発を招いた。結果的に内部分裂を起こして、彼らは表舞台から姿を消したが、Sun 追放の禍根が尾をひ

<sup>61</sup> Hyatt:37。

<sup>62</sup> Hyatt:37。

<sup>63</sup> CR8:241 全国宣教師会議 (上海 1877) に参加したメンバー、役割、分野、組織名などを列記。

<sup>64</sup> Records of the General Conference 1878:147~152。

<sup>65</sup> Records of the General Conference 1878:323~328。

<sup>66</sup> Hyatt:38。

<sup>67</sup> Hyatt:38。

<sup>68</sup> Hyatt:39。

<sup>69</sup> Hyatt:39。

いていた。クローフォード夫人は心労のあまり疲労困憊、夫婦間にふたたび亀裂が走るかと思われた。夫か学校かの選択を迫られた夫人は、夫の要求に屈したものの、それは手足をもがれるような苦痛をとまなうものだった。1878年5月クローフォードは脳軟化症に起因すると思われる脚部麻痺に襲われた<sup>70</sup>。6月22日、どこへ行くのかおそらく彼自身にもわからぬままに、彼は登州から姿を消した<sup>71</sup>。

### 11. 福音ラッパを吹き鳴らせ

数ヶ月後登州の夫人のもとに、クローフォードの消息を告げる知らせがとどいた。57歳のクローフォードはサンフランシスコにいた。上海時代の短期の帰国以来20年ぶりだった。

1878年12月彼は東海岸をめざした。さらに4半世紀を生き延びたクローフォードの生涯は、ここからゆるやかな起伏をくりかえしながら、最終局面を迎える<sup>72</sup>。

1879年の冬彼は東海岸の各地で講演した。定番は人種問題(The Races of Men)で、そこから宣教師や中国人移民の問題に逸れていくのが定石だった。中国人は生けるミイラ、モンゴル人は音楽も詩もない野蛮人とこきおろした上で、白色人種の優位を強調、そのすぐれた知性と決断力こそ他の諸民族の牽引役として神の祝福を受けるに値する、と結論づけた。かつては寛容だった人物が、挫折という個人的経験を経て、ダーウインの進化論を否定するに至る道程をみる思いがするとも評された<sup>73</sup>。実体験に基づく彼の講演は好評だった。1879年春にはRichmond Collegeから神学博士の称号を贈られた<sup>74</sup>。

中国にもどった彼はかつての活力をとりもどしていた。謝礼を徴収したにも拘わらず、入学希望者はふえていた<sup>75</sup>。登州の女性指導者ムーン(Charlotte (Lottie) Diggs Moon, 幕拉第)も教えていた。夫人の学校はなかでも好評で、卒業生のうち3人は信徒で教師になり、Kwoは夫人の学校の教頭になっていた。夫人は妥協点をさぐったが、クローフォードは譲らず、医療活動<sup>76</sup>も学校運営もすべてを放棄するよう強要した。1881年夫人とは教員仲間で親友のホーム

<sup>70</sup> Foster:180 1878年6月出航、カリフォルニアで数ヶ月を過ごし、ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィア、ワシントンを経て、リッチモンドの本部へ。滞米中各地で助成金を引きあげるようよびかけた。

<sup>71</sup> Hyatt:40, 41, 256, 257。

<sup>72</sup> Hyatt:42。

<sup>73</sup> Hyatt:43。

<sup>74</sup> Foster:183 それまで現地信徒の間では、現地の子供の教育と終身雇用は、海外本部と外人宣教師の正統的な義務だと考えられていた。Hyatt:44。

<sup>75</sup> Foster:184 衣服は自前でと要求したが、これは当時の中国の寄宿校としては改革的な前進だった。

<sup>76</sup> Crawford:30, 31 Dr. バートン(Dr. Burton)は現地人に対する無料の医療活動は、福音伝道にとってあきらかな妨害行為であるといい、クローフォードも同調した。

ズ (Sally Little Holmes, 花撒勃) が引退したのも打撃だった<sup>77</sup>。ミニーの結婚<sup>78</sup>とフレディーの寄宿校入りをみとどけると、夫人は突然登州を離れた<sup>79</sup>。

それから2年、夫人は静かな帰郷の喜びを味わっていた。一方クローフォードは夫人が登州を離れた直後に学校を閉鎖し、抗議の声が高まったためやむなく謝礼徴収の増額とカリキュラムの変更を条件に授業再開を認めたが、生徒数は減少した<sup>80</sup>。

1882年の末、夫人は本部に宛てて、クローフォードの意見を全面的に支持することを表明、学校は1884年1月正式に幕を閉じた。それと引き換えに、クローフォードは残る会員の尊敬とムーン女史の信頼を失った<sup>81</sup>。本部から山東東部に派遣された7名の宣教師のうち、最後まで倒れなかったのは、プルート (Cicero Washington Pruitt, 浦其維) だけで、ほかの6名は神経を病むか奇怪な死を遂げた<sup>82</sup>。給料の使い方まで指図しようとするクローフォードの強圧的なやり方は当然反発をよんだ。万策尽きたクローフォードは Monument Street 地区の主導権をプルートに譲ろうとするが、プルートは応じなかった<sup>83</sup>。

1885年クローフォードは1冊の本に出会った。ビルマに派遣された北米バプティスト会員のアボット (E. L. Abbot) の業績をあつかったもので、クローフォードの目には理想的と写ったアボットのしごとを、本部は認めようとしなかった。アボットに圧力をかけ、貝殻追放に追い込んだのは本部を含む黒幕で、彼らは事情を知らぬ会員を煽って活動資金を負担させるというサイクルを巧妙にくりかえしていた、というのがクローフォードの分析だった<sup>84</sup>。クローフォードは自立問題に関する本部の意向をただすべく、夫人を登州に残して自弁で帰米<sup>85</sup>、5月から10月にかけてテキサスからヴァージニアに至る各地の教会組織をまわって、会員の資金の使途をただせと説いてまわった。リッチモンドの本部に着くころには、本部は特別委員会を組織して、クローフォードの出方に対処するはずを整えていた。彼が強制的に廃校措置をとったという

<sup>77</sup> Foster:185 クローフォード夫人は女性たちの家庭に赴いて、親身の福音伝道を行なった。生徒への接し方も好評。Hyatt:46。

<sup>78</sup> CR12:470。

<sup>79</sup> Foster:186。

<sup>80</sup> Hyatt:47。

<sup>81</sup> Hyatt:47。

<sup>82</sup> Hyatt:50。

<sup>83</sup> Hyatt:50。

<sup>84</sup> Hyatt:51; Crawford:41~63 これより先、クローフォードに本部から送られた1冊の本があった。カーペンター (C.H. Carpenter) 著 *Self-Support Illustrated in the History of the Bassien Karen Mission, from 1840 to 1880.* がそれで、現地教会の自立をおそらくはじめて説いたこの本に感銘を受け、1885年帰米して本部の見解を問うたが、本部の反応は煮え切らないものだった。

<sup>85</sup> CR16:160 1885年4月9日クローフォード上海からサンフランシスコに向け出発。

ムーン女史からの情報も、クローフォードには不利だった<sup>86</sup>。本部の下した決断は、ただちに講演をやめ中国に帰れ、というものだった<sup>87</sup>。

1890年7月登州の夫人のもとに帰着、ここで新補充要員のひとりボスティック (George Pleasant Bostick, 包治丕) と出会って意気投合する<sup>88</sup>。1892年1月南部の教会に向けて発送した「教会よ、前線へ (Churches, To the Front!)」と呼びかけたパンフレットは、一極集中を非難し、改革に背を向ける本部の無為無策を攻撃するものだった。ここに至って本部はクローフォードを追放し<sup>89</sup>、1893年には宿敵ハートウエルの中国復帰を決めた<sup>90</sup>。クローフォードは登州を去り、同志とともに泰安府に入って Gospel Mission の展開を図ったが<sup>91</sup>、1900年の義和団事件で挫折し、夫人とともに帰米、ジョージア州の夫人の住居で死去した<sup>92</sup>。72歳になった夫人は再び泰安府に戻って、さらに7年の布教活動をつづけ<sup>93</sup>、1909年8月9日波瀾に満ちた生涯を閉じた<sup>94</sup>。

### おわりに

ペキン条約直後から反キリスト教運動が起こった。これは外国宣教師の条約上の特権に対する民衆の反感、北京条約以後の教会用地問題などが誘因となっている。クローフォードが中国へ派遣されたのは、こうした時期だった。妥協を許さぬクローフォードの態度は現地民の反感を買った。各地の教会を扇動して本部に改革を迫る彼を追放しなければ、本部の存在じたいがあやぶまれる事態となった。彼の過激な行動原理はクローフォード主義 (Crawfordism) とよばれて、一時は揶揄の対象とされた。

クローフォードの死 (1902) 後、現地教会の自立に焦点をあてた論文が多数 *The Chinese*

<sup>86</sup> Hyatt:52。

<sup>87</sup> Hyatt:53, 54。

<sup>88</sup> Foster:210, 211。1889年7月、ボスティック夫妻が登州に着いてクローフォード夫妻に合流したが、登州の信徒はすでに分裂状態で、卒業生は就職先を求めて他の組織に目を向けるようになっていた。後継者育成の必要から、両夫妻は登州にとどまることで一致した。

<sup>89</sup> CR66:737 クローフォード夫妻の本部離脱を簡単に報告。Crawford:62, 137 クローフォードの提案は全面的に採択されたかにみえたが (詳細は Minutes of the Southern Baptist Convention of 1886 at Montgomery, Ala.:23~25)、本部は彼を擁護せず任地への帰還を命じた。

<sup>90</sup> Crawford:138。1892年から93年にかけての冬、宿敵ハートウエルの登州帰任の噂がひろまり、クローフォードは本部の措置を予測する。

<sup>91</sup> Crawford:23 ‘Gospel Mission’は組織 (organization) ではなく、運動 (movement)。

<sup>92</sup> CR33:456~458。ボスティックによるクローフォード追悼記。Hyatt:58。

<sup>93</sup> Hyatt:59。

<sup>94</sup> CR40:523, 534TPC77。クローフォード夫人の死に寄せる追悼記、筆者はペキン在住のマーティン (W. A. P. M. と署名)、While the church has lost a worker, heaven has gained a saint とその生涯を讃えた。CR41:167~169 夫人追悼記。CR41:367 夫人の献身に謝意。

*Recorder* に現れた。カバーする範囲はおおむね東アジア、とりわけ中国が多い。ある程度時間が経つと編集部がまとめて問題点を整理し、それをもとにさらに議論を発展させていく。1916年あたりから、農村伝道と都市伝道のちがいに着目する、宗教組織同士が個々に動くよりも協調して一元化することで冗費を省く、有能な中国人助手を育成するための具体的な手段に焦点が移っていくのがみてとれる。

最後にクローフォード(中国名:高第丕)と張儒珍の共著で、金谷昭が訓点を施した『大清文典』(明治10年9月新刻)に触れておく。「蓋し彼国の文法の説、實に是の書(『文学書官話』(Mandarin Grammar)を以て嚆矢と為す)と例言で謳っており、日本でも珍重された。国会図書館、都立中央図書館(特別買上文庫6600)、関西大学総合図書館(LM2/に/23)所蔵の3書をこれまでに確認しており、内容は3書全同。なお、本稿は漢字文化圏近代語研究会ソウル大会(2010.3.19)における報告に加筆訂正したものである。ご列席の沈、陳、朱、千葉の諸先生から貴重なご助言をいただくことができた。厚く感謝申しあげる。

#### 参考文献 (*The Chinese Recorder* は上記)

*Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China Held at Shanghai, May 10-24, 1877* 1878 Shanghai: Presbyterian Mission Press.

Crawford, Tarleton Perry 1903 *Evolution in My Mission Views or Growth of Gospel Mission Principles in My Own Mind*. Kentucky.

Foster, L.S. 1909 *Fifty Years in China—An Eventful Memoir of Tarleton Perry Crawford, D.D.* Bayless-Pullen Company, Nashville, Tenn.

Wylie, Alexander 1967 *Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press. (rep. Cheng Wen) .

Latourette, Kenneth Scott 1975 *A History of Christian Missions in China*. Taipei: (rep. Cheng-wen) .

Hyatt, Irwin T. 1976 *Our Ordered Lives Confess: Three Nineteenth-Century American Missionaries in East Shantung*. Harvard Studies in American-East Asian Relations; 8: Cambridge, Mass., London, England: Harvard University Press.

MacGillivray, D. 1979 (ed) *A Century of Protestant Missions in China (1807~1907)*. San Francisco: Chinese Materials Center, Inc.

Smith, Carl T. 1985 *Chinese Christians: Elites, Middlemen, and the Church in Hong Kong*. Oxford University Press.

吉田寅 1997『中国プロテスタント伝道史研究』汲古書院、東京

山本澄子 2006『中国キリスト教史研究』増補改訂版 山川出版社、東京

(キーワード: 現地教会の自立、クローフォード vs ハートウエル、本部離脱)